

グリーンルーフ

鹿児島市立美術館だより

館蔵品誌上ギャラリー㊦



和田英作「夕暮 (グレー)」1902年

表紙の作品

和田英作「夕暮 (グレー)」
1902年 油彩・キャンバス
60.8 × 45.8 cm

平成14年度に購入し、新しく収蔵品の仲間に加わった作品である。

和田英作(1874～1959)は明治32年(1899)に渡欧し、翌33年3月から文部省留学生としてパリに赴いた。フランス滞在は明治36年(1903)5月まで3年余りに及ぶ。和田は同じ鹿児島出身の黒田清輝から薫陶を受けていたため、滞仏中の行動には黒田の影響が強い。パリ南東郊外の小村グレーに滞在したのもその一つと言える。黒田はその滞欧時代の後半、約2年半にわたってグレーに滞在し多くの優れた作品を残している。

和田は明治34年(1901)10月から翌35年(1902)3月まで半年間、浅井忠と共同生活をしながらグレーで暮らした。本作品には1902年2月25日の年記があり、グレー滞居終盤の制作であることが分かる。家並みの上方に薄雲のかかった満月が輝く夜の情景は、どこか神秘的な雰囲気を感じさせる。あるいはそこに、世紀末象徴主義絵画からの影響を指摘することが可能かもしれない。これと似た雰囲気は、やはりグレーで描かれた「読書」(石橋財団石橋美術館蔵)にも感じられるし、パリに帰ってから描かれた「こだま」(財団法人泉屋博古館蔵)ではより顕著となっている。

る。平明温雅な作風をよくした和田の画業のなかでは、これらは特異な系譜に位置付けられる。

ただし、本作品に見られるようなかそけき光の表現は和田の最も得意とするところであった。代表作の「渡頭の夕暮」をはじめ、和田の描く風景画には黄昏や朝焼けの微妙な光をとらえた佳品が多い。これらは、明るい陽光のもとでの描写をよくした黒田とは異なる外光派的な作品と言える。和田が、黒田の影響を強く受けながらも独自性を発揮した点として注目すべきである。しかし、同じく微妙な光を表した作品であっても、湿潤な日本の風土を叙情的に描いた作品群と本作品の神秘的な雰囲気は別題のものである。

なお、和田は明治35年9月に開催された白馬会第7回展に出品するためフランスから13点の作品を送っている。その中に図版等から「婦人読書」(前出の「読書」)、「冬の池畔」(財団法人長島美術館蔵の「グレー風景」)、「冬の日」(昭和36年発行の『和田英作遺作展図録』No.22に「グレー風景」として掲載)、「水車」、「編物」といったグレーで描かれたことが明らかな作品が5点含まれている。他の図柄が不明な作品の中に「月」と題されたものがあり、あるいはこれが本作品のことではないかと推察される。

鹿児島市立美術館

〒892-0853
鹿児島市城山町4-36
TEL.(099)224-3400
FAX.(099)224-3409


Kagoshima City Museum of Art